

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.10 October 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

10

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その7
／井上 昭洋 1

・英語文献にみる天理教 (18)

『Japan To-Day (現時の日本)』(5)
／尾上 貴行 2

・天理図書館外史 (5)

天理図書館の文化的価値—文化資源活
用の一つの取り組み②
／三濱 靖和 3

・音のちから—中国古代のひとと音楽 (34)

逸話を通して見る音の世界—大切な楽
器の修理—
／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景 (16)

アンテペラム期の米国系プロテスタン
ト教会による布教活動⑩
／中西 光一 5

・熊本地震と私—災害支援に学んだこと (2)

おやさまによって敷かれたレール
／茶木谷 吉信 6

・2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝 道学 (4)

第4講：異文化伝道論3—ブラジルか
ら日本へ：在日ブラジル人の布教
／中西 光一 7

・おやさと研究所ニュース 8

2026 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その7

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

「元初まりの話」では、うをとみに続いて、す紙幅はないが、「元の理」を理解するには、それぞれの方角から六つの水棲動物(しゃち・方位以外の視点も必要になってくるのではなかめ・うなぎ・かれい・くろぐつな・ふぐ)いか。

が月日両神に引き寄せられる。それぞれに神名が授けられ、二柱の雛型と六柱の道具が定まり、人間創造の準備が整う。一方、十人のつとめ人衆がかんろだいを囲んで勤めるかぐらづとめで、六柱の神名(道具)を勤めるつとめ人衆の立ち位置は、それぞれの道具(水棲動物)がもった方角になっている。神話と儀礼は相補関係にあるというのが神話学の定説だが、「元初まりの話」とかぐらづとめの間にも同様の関係が見いだせる。

天理教の信者であれば、つとめ人衆の配置図を一度は見たことがあるだろう。また、「十全の守護」の説き分けも知っているの、その両者を照らし合わせて、「元の理」をより深く胸に納めようとしているはずだ。しかし、「元初まりの六だい」の六柱、すなわち三つの対(父性・母性、男性性・女性性、夫・妻の対)はそれぞれ対極の位置に配せられるのに、残りの四柱、すなわち「十全の守護」の説き分けで対となっている二柱—くもよみのみこと(東)とかしこねのみこと(坤)、たいしよく天のみこと(艮)とをふとのべのみこと(西)—は相対していない。かんろだいを中心とする同心円上、それぞれの方位に配せられる神名すべてが、対極の神名と対になっていけばすっきりするのに、と思ったことはないだろうか。

道具衆の意味を考える時、方位は確かに重要な手がかりであり、相対する二つの神名(道具)の間に強い関係性が想定される。先に示した四柱の二対は方位上対峙していなかったが、逆に対峙する二対—くもよみのみこと(東)とをふとのべのみこと(西)、たいしよく天のみこと(艮)とかしこねのみこと(坤)—は、「十全の守護」の説き分けでは対峙性が明示的でなく、個別の読みが必要となってくる。ここではその読みについて詳細に記

こうした方位だけでは解けない部分に、別の角度から光を当てたのが、教外の研究者として「元初まりの話」を最も体系的に読み解いて見せた蔵内数太である。彼の「元の理」研究は多岐にわたるが、中でも示唆に富んでいるのが六柱の道具衆についての解釈である。彼はまず、方位に基づく対極性と異なる切り口として、六柱の道具衆を東側の女神三柱(ふぐ・うなぎ・かめ)と西側の男神三柱(しゃち・くろぐつな・かれい)に分ける。さらに個々の道具の性質を分析した上で、前者は生命の個性性を意味し、求心的・統合的側面があるとし、後者は他者との関係性を意味し、遠心的・展開的側面を持つとする。

彼はさらに「層位」という視点を導入して、六柱の道具衆の意味を考察し、東西の女神・男神の各三柱が三つの層に分かれて、そこに三種の対応関係があることを示す。すなわち、太く分厚いもの(ふぐ・しゃち)は植物的層に属し、細長いもの(うなぎ・くろぐつな)は動物層に、平たいもの(かめ・かれい)は人間的層に属するというのだ。この層位の視点により、それぞれの道具は対極の方位にある神名(道具)だけでなく、同じ層位にある神名との関係性において解釈されることになるが、詳細な解説は次回に譲りたい。

〔註〕

(1) 十柱の神名のうち残る四柱もそれぞれの方角(北・南、中南・中北)を占めるが、その方角の解釈については立ち入らない。

(2) 蔵内数太
(1979)『泥海古記』について：中山みきの人間学』赤心社。

(1986)『G-TEN』第14号「特集：蔵内『元の理』学」。

(1988)『『元の理』と世界思想—特に易との関連から』『G-TEN』第26号、49～67頁。『講座「元の理」の世界2：「元の理」の象徴学』に再録)